福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI
REPOSITORY

名所図会に見る近世後期の若狭と越前(一)：嶺南地方から丹南地方南部まで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 膽吹, 覚 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/1903

名所図会に見る近世後期の若狭と越前（一）

――嶺南地方から丹南地方南部まで――

膽吹覚

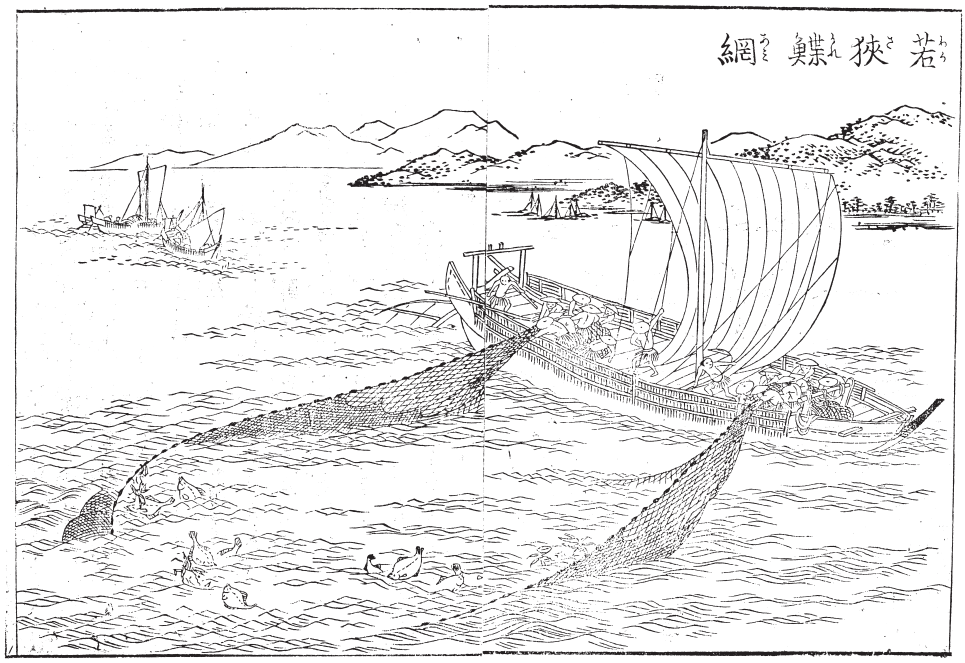
はじめに

近世後期、名所図会本と呼ばれる、挿絵入りの観光ガイドブックが相次いで刊行され、大いに流行した。名所図会本の魅力について、宗政五十緒氏は、次のように記している。

「名所図会」は一種の地誌、案内書で、名所・旧跡や神社や寺院から、世上の風俗・人情・行事、また、その地域にまつわる説話・物語や口碑・伝説の類を収録して解説している。しかし、これに加えて、描写の詳細な絵図を掲載しているところに、その大きな特徴がある。この詳細な絵図を収録しているというところが、図会本の魅力の第一になっているのである。このことは名所図会本以前に出版された絵入りの地誌や案内書の挿絵と比較してみると容易に知られる。（宗政五十緒編著『大阪の名所図会を読む』「まえがき」、東京堂出版、平成十二年九月刊）

宗政氏が指摘するとおり、名所図会本の最大の魅力は、その精緻な挿絵にあるといってよいであろう。そこで、名所図会本に掲載された挿絵を使用して、江戸後期の若狭・越前両国（現在の福井県に相当する地域）の有様をビジュアルに示すことが出来たならば、というのが本稿のねらいである。名所図会本の挿絵を使用して近世後期の景観を研究することは、しかし、名所図会本の挿絵が当時の実際をそのまま描いたものであるか否か、という問題があるであろう。この問題について宗政氏は、次のように述べている。

江戸時代の一般の絵画にあっては「絵空事」という言葉があるように、絵は必ずしも実際を描いたものなくても構わない、という約束があったはずである。しかし、西沢一鳳の「秋里籬島の話（『伝奇作書』残編中の巻）に記されるように、名所図会の挿絵は、絵師が実際に見て描いたものであるといわれているように、全体としては大凡、事実の写生にもとづくものと考え



挿絵１　若狭鰈網

てよいであろう。（中略）ただし、部分的には若干の問題はあろう。例えば、風景図における個々の部分の位置関係・鳥瞰図における建築物の寸尺、などについては事実とは若干の相違があると考えられる。（宗政五十緒「近世後期の京三条大橋から大津札の辻まで―名所図会に見る大津街道―」、『京都歴史資料館紀要』第十号、平成四年十一月刊）

宗政氏が指摘するとおり、名所図会本の挿絵は、全体としては大凡、事実の写生に基づくものと見てよいであろう。本稿に掲出する挿絵はそれゆえに、大凡、十八世紀後期から十九世紀初頭の若狭・越前両国の有様を描いたものと把握して大凡、誤りはないと思われる。なお、本稿は挿絵を多用するために紙数が多い。それゆえ、その第一編を現在の嶺南地方から丹南地方南部まで、その第二編を丹南地方北部から福井市まで、第三編を坂井市・あわら市とし、全三編に分けて掲載させていただきたい。本稿はその第一編である。また、本稿に掲出する『二十四輩順拝図会』、『日本山海名物図会』、『日本山海名産図会』収載の挿絵は、すべて本学附属図書館所蔵本を複写転載したものであることを記しておく。

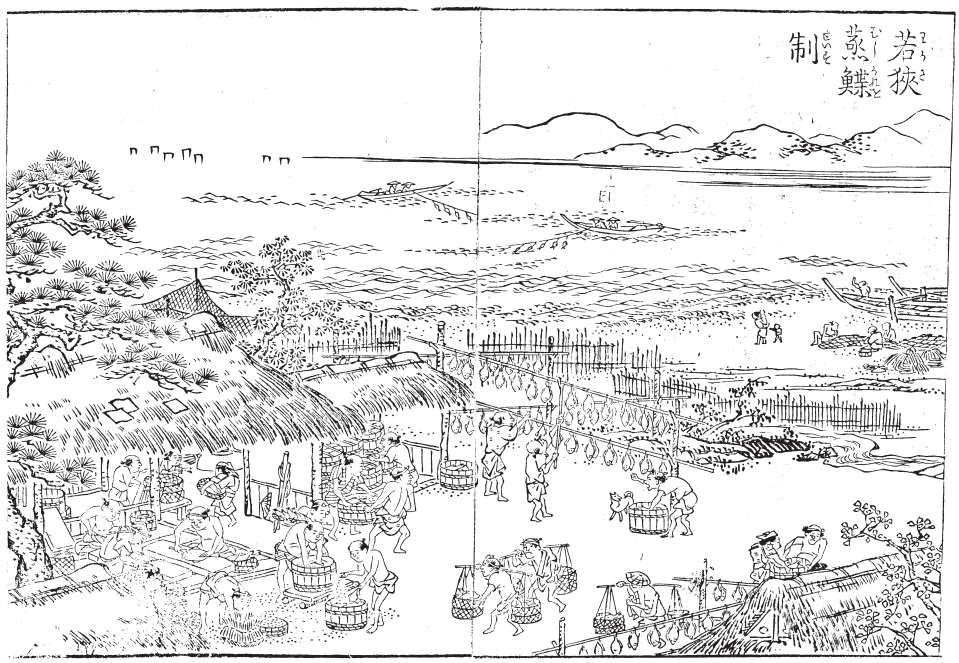
１　若狭鰈

挿絵１は若狭の鰈漁の様子を描いたもの。『日本山海名産図会』第三巻に載る。その解説文には、次のように記されている。

海岸より三十里ばかり沖にて捕るなり。その所を鰈場といひて、若狭・越前・敦賀・三国の漁人ども手繰網を用ゆ。海の深さ大抵五十尋、鰈はその底に住みて、水上に浮かむ事稀なり。漁人、三十石ばかりの船に、十二、三人舟の左右にわかれ、帆を横にかけ、その力を借りて網を引けり。アバは水上に浮き、イハは底に落ちて網を広めるなり。外の子細なし。網中に混り獲る物、蟹多くして、もっとも大いなり。

この解説文に拠ると、江戸時代の鰈漁は、海岸から三十里（約百二十㎞）ほどの沖合で行っていた。その漁場を鰈場という。鰈場周辺の水深は五十尋（約七十五ｍ）あり、鰈はその海底に生息しており、水上に浮かんでくることは滅多にない。そこで、漁師たちは挿絵に描かれているような三十石ほどの大きさの帆かけ船で沖に出て、手繰網で鰈を獲った。絵の右側、船上には十五人ほどの男たち。全員上半身裸で、腰蓑をつけ、菅笠をかぶっている。船の後部（絵の中央部）には舵をとる男が一人。帆の左右には漁師が六人ずつ。帆の下には風向きを見ながら帆を操る男が二人。この帆かけ舟は、海上を吹き抜ける風に対して船体を横に向け、その帆に垂直に風を受けることで、その風の力を借りて網を引き上げるのである。なお、絵の中央下部に一匹の越前ガニ（ズワイカニ）が描かれているので、この絵が冬の鰈漁を描いた一枚であることがわかる。

手繰網で取り上げられた鰈は、浜辺に上げられると、すぐに塩



挿絵２　若狭蒸鰈制

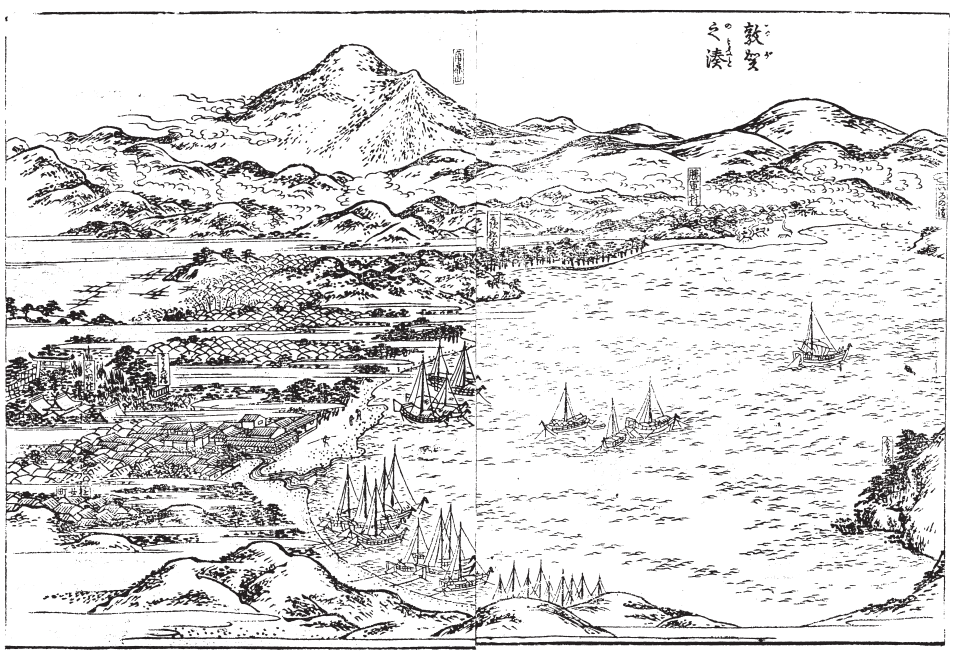
蒸しにされる。**挿絵2**はその塩蒸しの様子を描いたもの。同じく『日本山海名産図会』第三巻に掲載されている。その解説文には、次のようにある。

塩庫風乾。これをむし鰈と云ふは、塩蒸なり。火気に触れし物にはあらず。先づ取り得し鮮物を、一夜塩水に浸し半熟し、また砂上に置き、藁薦を覆ひ、温湿の気にて蒸して、後二枚づつ尾を人に繋ぎ、少し乾かし、一日の止宿も忌みて即日京師に出だす。その時節においては、日毎隔日の往還とはなれり。淡乾の品多しといへども、これ天下の出類、雲上の珍味と云ふべし。

右の解説文にあるとおり、若狭の蒸鰈は塩蒸しで、火気に触れたものではない。浜辺に上がった鰈は、まず一夜塩水に浸され、半ば熟成させる。その後、絵の左下部、藁葺きの作業小屋の前で、藁薦で覆って塩蒸しにする。蒸し上がった鰈は、絵の右中央部、二枚ずつ尾を上にして棹に干されて天日で乾燥。干し上がった鰈は、一日の止宿もなく、京都に出荷されたという。

また、絵の中央上部、沖には小鯛の延縄漁が描かれている。小鯛も若狭の名産。『日本山海名産図会』は、次のように説明している。

これ延縄を以て釣るなり。また、せ縄とも云ふ。縄の大さ一握ばかり、長さ一里ばかり。これに一尺ばかりの苧糸に針附け、一尋一尋を隔てて縄に列ね附けて、両端に樽の泛子を括り、差頃ありてかの泛子を目当に引き上ぐるに、百糸百尾を得て、一



挿絵3　敦賀之湊

も空しき物なし。餌は鯵・鯖・蝦等なり。同じく淡乾とするに、その味また鰈に勝る。

延縄漁というのは、絵に描かれているように、幹となる綱に多数の枝のような縄をつけ、その先の釣り針に餌をつけて海に投入し、数時間後に引き上げるという漁法のこと。小鯛の餌には鯵や鯖、蝦などが使われていた。若狭湾で獲れた小鯛は鰈と同じように塩蒸ししたあと、天日干しされた。その味は鰈に勝るとも劣らないものであったという。

2　敦賀湊

挿絵3は敦賀港を北西、杉津方面から描いた鳥瞰図。『二十四輩順拝図会』第二巻に載る。その解説文に曰く。

敦賀は荒乳山より行程四重にして越前第一の繁花なり。数千の人家軒をつらね、都の商賈入りつどひ交易を事とす。いにしへよりこの地には遊女ありて、いとも賑しき大湊なり。崇神天皇の御宇、異国より額に角生ひたる都怒我阿羅斯等といふ者この地に着せしより地名を角鹿と名づくといへり。すなはち今の敦賀なり。

敦賀は、江戸時代、越前国第一の繁華街であった。敦賀には絵にあるとおり大きな港があり、北国と上方とをつなぐ中継港として繁昌していた。敦賀で中継された北国の物産は、北国街道を経て近江国に入り、そこから再び船で琵琶湖を縦断し大津へ。大津からは大津街道を通って京へ運ばれていた。絵にも、敦賀港に停泊する数艘の北前船が描かれている。また、解説文に「いにしへよりこの地には遊女ありて」とあるとおり、絵の左下部には「遊女町」が見える。この遊女町について、近世前期の遊里の解説書である藤本箕山『色道大鏡』は、「敦賀の遊郭は六軒町といふ。揚屋の居るところを三ツ屋といふ。傾国の遊料十六匁、次は十匁なり、端女は六匁宛」（『色道大鏡』、八木書店、平成十八年六月刊）と記している。「遊女町」の少し上方には「けひ明神」（気比神宮）の大鳥居が見える。気比神宮について『二十四輩順拝図会』は、

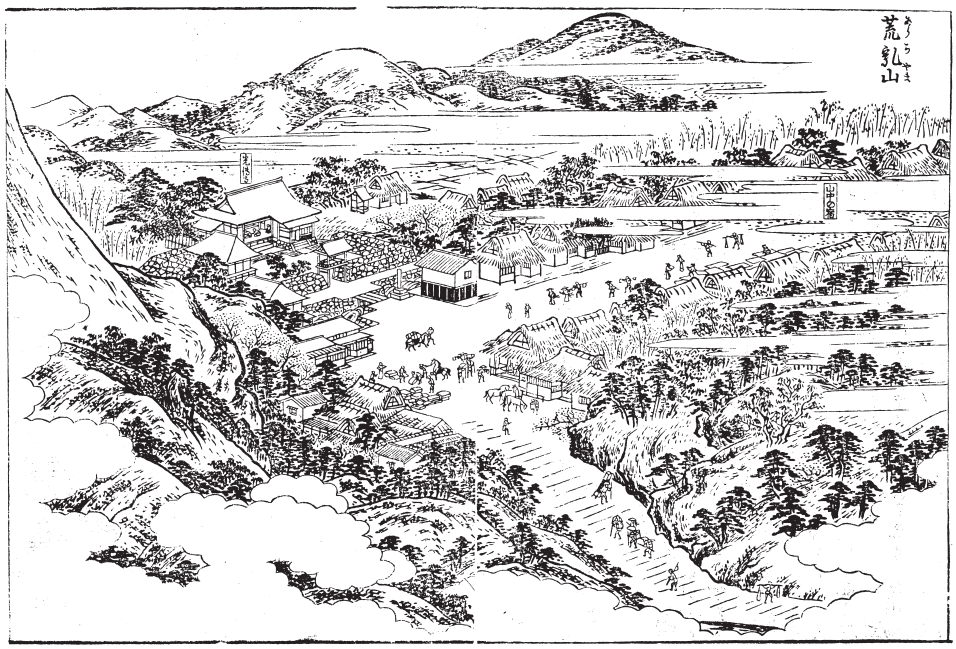
気比大明神の社は敦賀郡にあり。いにしへ仲哀天皇角鹿に御行したまひし時、行宮を建てさせられ笥飯の宮と号けたまふ。神功皇后十三年、誉田太子この行宮を拝し、天皇を崇め奉りて笥飯の神と祝ひ祭りたまふといへり。『万葉集』の歌に、

けひの海よそにはあらじ芦の葉の乱れてみゆるあまの釣船

と簡略にその由来を記載している。気比神宮は越前国一ノ宮である。

3　荒乳山

荒乳山（愛発山）は越前国と近江国の国境にある。この山麓に



挿絵４　荒乳山

はかつて古代の三関の一つ、愛発の関が設けられていたこともあり、近世後期も北国街道の交通の要所の一つであった。**挿絵４**は『二十四輩順拝図会』第二巻掲載の荒乳山山麓を描いた挿絵である。その説明文には、次のようにある。

荒乳山は近江と越前の境、山中の宿にあり。江州大物超専寺より行程十三里余。往昔親鸞聖人越の国に左遷たまふ御時、この山の嶮しきに行きなやみたまひ、

越路なるあらちの山に行き疲れ足もちしほに染むるばかりぞ

と詠じさせたまふ。この御歌を見てもその嶮難を思ひやるべし。今は都よりの往来繁く街道となりたれば、山を開き道を造り往来せるに容易し。祖師の御在世は今を去る事六百余年、田畠も海となり、滄海も山と変ず。今を以ていにしへを論ずる事なかれ。

「山中の宿」は絵の右上部。ここは西近江路の敦賀側の最南端の宿場。解説文にある「江州大物超専寺」は琵琶湖の西岸、滋賀県志賀町大物にある浄土真宗本願寺派の寺院。絵の左側の「光伝寺」は浄土宗の寺院。明治時代の廃仏毀釈によって廃寺となって、今はない。「光伝寺」の門前、「く」の字に折れ曲がる街道沿いには、馬から積荷を下ろしたり、馬に水を与えたりしている男の姿が描かれている。ここより敦賀までは四里（十六㎞）、近江の海津までは三里半（十四㎞）の距離。近世後期の荒乳山山麓は、絵のように街道が整備されていたので、「今は都よりの往来繁く街道と

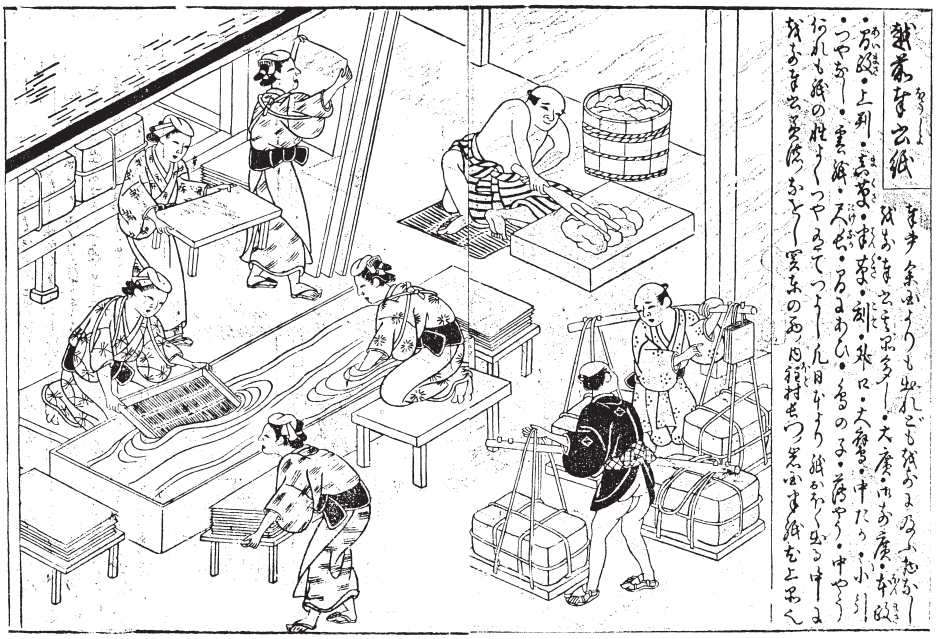
挿絵５　湯尾峠

なりたれば、山を開き道を造り往来せるに容易し」であった。

４　湯尾峠

挿絵５は『二十四輩順拝図会』第二巻掲載の湯尾峠の挿絵である。湯尾峠は『二十四輩順拝図会』の解説文に「湯尾峠は今庄と鯖波の間にあり、孫嫡子の茶屋とて疱瘡の守を出だす所あり。」と記されているとおり、北国街道（現在の国道三六五号線）の今庄宿と鯖波の間、現在の南越前町湯尾にある標高約二百ｍの峠である。江戸時代、この峠には「孫嫡子の茶屋」と呼ばれる茶屋があり、そこで疱瘡にご利益のある札が授けられていた。湯尾峠の孫嫡子の茶屋は井原西鶴『男色大鑑』、近松門左衛門『傾城反魂香』、十返舎一九『湯尾峠孫杓子由来』にも登場するほど、江戸時代は全国的にその名を知られていた。

絵は右が南で、左が北。図の右端に「木の目峠」、その左に「中河内」とある。「中河内」は近江国、現在の滋賀県西浅井郡である。絵の左上部に見える茅葺の茶屋が「孫嫡子の茶屋」。店頭に「孫嫡子大明神」と掲げられている。「孫嫡子」とは子々孫々までという意味。この札があれば疱瘡は治癒し、また、その家は子々孫々まで疱瘡が軽く済むといわれている。店の縁には三人の男。その右端、頬に疱瘡のあとの見える男が店の女から札を頂いている。店前の街道には振袖姿の少女が一人。頭巾をかぶり、袖で顔を隠しているが、その隙間から見える顔には確かに疱瘡の痕。彼女もこ



挿絵６　越前奉書紙

の茶店のご利益に与りに着た一人。この後は近くの孫嫡子社へ参拝し、その近くに待たせてある駕籠で帰るはずである。

５　越前奉書紙

挿絵６は越前和紙の製造過程を描いたもの。『日本山海名物図会』第三巻に収録されている。

絵の右上部、上半身裸の男が筵に座して、箆のような棒で原材料の白皮を叩いて、繊維を一本ずつ解している。この作業を叩解という。叩解が終わると、絵の中央部、漉舟と呼ばれる長方形の舟に水を張り、そこに叩解した紙料とネリを入れて紙料液を作る。絵には二人の女性が台の上に座って、漉桁で漉舟の中の紙料をすくい、前後左右に軽くゆすって、水分を落としている様子が描かれている。この作業を汲み入れといい、汲み入れを繰り返して、希望の厚さの紙を作る製法を流し漉きという。漉き上がった紙は、絵の左下隅に見える紙床板の上に重ねて置かれ、ある程度の量の紙が積み上がったら、絵の中央下部に描かれているように、紙床板ごと抱え上げられて、絵の左上部の干板近くまで運ばれる。絵にはまだ湿りの残っている和紙を一枚ずつ銀杏の板に張り、乾燥させている女性の姿が見える。乾燥させた和紙はその後、一枚一枚、選別・検品を受けたあと、規定の寸法に裁断・梱包され、絵の右下隅、運送を担当する男たちによって、江戸や上方へと発送される。

絵の右側の解説文には、次のように記されている。

越前奉書紙。奉書、余国より出れども、越前に及ぶ物なし。越前奉書その品多し。大広、御前広、本政、間政、上判、真草、半草、刮、外口、大鷹、中たか、小引、つやなし、雲紙、尺長、間にあひ、鳥の子、薄やう、中やう、いづれも紙の性よくつや有りてつよし。およそ日本より紙おほく出る中に、越前奉書、美濃のなをし、関東の西ノ内程村、長門の岩国半紙、もつとも上品なり。

越前和紙は日本最高級の品質と、バラエティー豊富な品揃えで、当時の人々に高く評価されていたのである。

（第一編終了）